

ミトゥのたからもの

あるところに、^{ちい}小さな^{ちい}小さなコトリがいました。

なまえはミトゥ。

ミトゥはいつも^{げんき}元気いっぱい。

^{ちい}小さなからだで、^{おお}大きな^{おお}大きな^{もり}森のなかを、^と飛び^{まわ}回ります。

ミトゥは^{てんさい}あそびの天才。

^{こいし}小石や^は葉っぱ、^の野いちごを^ききよ^ろきよ^{さが}探したり、^{パタ}パタ^{パタ}パタッとももの^{すご}いい^{いき}きおいで
^{はね}羽を^{うご}動かして^{すな}砂の^{つく}けむりを^{つく}作ったり、^{バッ}ッタや^コオロギを^お追いかけます。

ミトゥは^{うた}歌うことも^{だいす}大好き。

^{あさ}朝は、^は葉っぱの^{うへ}上で、^{キラ}キラ^ゆれる^{つゆ}の^{しずく}雫と^{いっしょ}一緒に、^{よる}夜は^ひっそりとした^{しず}静けさを^{かん}感じ
^{ながら}歌います。その^{かわ}い^い声で^{くち}くち^{さむ}さむ^メロディーを、^{もり}森の^{なか}仲間たちは^{まい}毎日^{たの}たの^{しみ}しみに
しています。

ミトゥのおうちは、^{ふる}古い^{おお}大きな^きかえでの^き木にありました。

それは、ミトゥが、^{いち}一から^{つく}作った^こだわりの^おうちです。きれいな^こえだ^{いっ}ほん^{いっ}ほん^{えら}えら
^{まる}丸いかたち^{なら}に^{つく}並べて^{つく}作りました。^{おお}大きさも、ミトゥに^ぴぴったりです。

おうちのなかには^{たからもの}宝物がいっぱい。

^きお気に入りの^い石、^{いし}虫の^{むし}羽、^{はね}非常^ひじょう^{しよく}しよう^こ用の^こ木の実^みまでそろえています。それらの^{たからもの}宝物を、

ミトゥは森で見つけたふわふわキノコの下に、そおっとしまっていました。お部屋のかべには、かえでのお花や、季節ごとに見つけたきれいな葉っぱを、飾っていました。

近くにはきれいな川も流れていて、ミトゥはここでの暮らしをとて気に入りしていました。

なかでも一番のお気に入り、冬にかえでの木から採れる甘〜いシロップです。

新鮮なくだものや木の実がなかなか食べられない冬の間は、かえでの枝にできるシロップのつららがとびきりのデザート。**わぁ、なんておいしいシャーベットなんだろう！**

ミトゥは、最高の毎日を過ごしていました。

ところが、ある秋の日、大きな嵐がすべてを変えてしまいました。

その日の朝、ミトゥは、大きな雷の音で目が覚めました。稲妻が走り、まわりは激しい雨。

鳴り響く雷は、まるで爆弾が落ちているかのよう。あちこちに吹きすさぶ風は、

「グアアアー」「ゴオオオー」かえでの木を激しく揺さぶり、枝は、まるで頼りないワラのようです。葉っぱは、次々引っぱられて、裂けていきました。

ミトゥは「**これは大変！**」と巣の周りをおおえるものを探しました。ところが、ふわふわ

キノコはさかさまにひっくり返り、ミトゥの宝物はぜんぶ飛んでなくなってしまいました。

強い風とひどい雨は長く続き、かえでの木はギーギーと悲鳴をあげました。ミトゥのおうち

もガタガタ揺れ続け、枝もどんどん風にもぎ取られていきました。

おうちがバラバラに壊れてしまうのも時間の問題でした。

ミトゥは怖^{こわ}くなって、かえでの幹^{みき}に小^{ちい}さな穴^{あな}を見^みつけ、そこ^にに逃げました。

それからほどなく、おうちはどうとうバラバラになって地面^{じめん}に落^おちていきました。

ミトゥはただ黙^{だま}って見^みていることしかできませんでした。

つぎ ひ あさ あらし
次の日^{つぎ}の朝^ひ、嵐^{あらし}はおさまりました。

ミトゥは小^{ちい}さな穴^{あな}から顔^{かお}を出^だして、まわりを見^みわたしました。

．．． おうちがあつた枝^{えだ}には、何^{なに}も残^{のこ}っていませんでした。

ミトゥにとって、おちはただの住^すむところではなく、気^き持^もちが落^おち着^つく心^{こころ}のよりどころで
した。一^{いっ}生^{しょう}懸^{けん}命^{めい}作^{つく}った自^じ分^{ぶん}のお城^{しろ}です。毎^{まい}日^{にち}、食^たべて寝^ねて歌^{うた}って、安^{あん}心^{しん}と幸^{しあ}せを感^{かん}じられる
ところでした。

ミトゥは、ただ呆^{ぼう}然^{ぜん}とかえでの木^きの前^{まえ}に立^たちつくしていました。

どうしたらよいかも分^わからないけれど、おなかはぺこぺこ。

とほう
途^と方^{ほう}にくれていた、その時^{とき}でした。

「ミトゥ！そこ^にいたのね。大^{だい}丈^{しょう}夫^ぶ？ケガ^{けが}はない？」学^が校^{こう}からナイチンゲール^{せんせい}先生^とが飛^とんで
きてくれました。

「大^{だい}丈^{しょう}夫^ぶだよ、ナイチンゲール^{せんせい}先生[!]．．． ち^きゃんと木^きにつかまっていたから、なんと
も^なないよ．．．」ミトゥは泣^なきたいのをこ^こらえながら答^{こた}えました。

「ミトゥ、無^む事^じでよかつた。でも、．．．う～ん、な^なんだかとても悲^ひしそうよ．．．

な
何^{なに}があつたの？」ナイチンゲール^{せんせい}先生[!]はやさしく聞^ききました。

・・・パタパタ・・・パタパタ

・・・ミトゥはだまって自分のおうちがあったあたりへ行き、小さな声で言いました。

「ここに・・・おうちがあったの・・・」

「なんということでしょう、ミトゥ・・・」

ナイチンゲール先生はびっくりして羽を広げ、ミトゥのそばへ飛んで行きました。

「おうちも、かえでの木も、守れなかったの・・・宝物も全部・・・がんばったけど・・・怖くなって、放って逃げてしまって・・・もっとがんばれば良かった・・・と、ミトゥ。

すると、ナイチンゲール先生が心配そうに聞きました。

「ミトゥ、もしかして、おうちがなくなったことを、自分のせいだと思っているの？」

「・・・だって、そこから離れてしまったんだもの。もっとがんばって守れたらよかったのに・・・」ミトゥの声は、すっかり自信を失ったかのようです。

・・・ミトゥも、ナイチンゲール先生も、しばらく黙っていました。

あたりは、雨であふれた川の「ゴオオー」という音だけが聞こえていました。

ふと、ナイチンゲール先生が、ふたたびミトゥに語りかけました。

「ミトゥ？このかえでのお花、とってもきれいよね。でも、時々、うまく咲けないお花もあることに、気がついたことある？例えば、茎がよじれていたり、何かの理由で、咲くまで時間が、かかったり」

ミトゥは、ナイチンゲール先生が何を言おうとしているのかわかりませんでした。でも、先生が自分のことを助けてくれようとしているのかなと感じて、答えてみました。

「うん、見たことある。みんなおんなじようには咲かないね。いつまで待っても咲かなかったり、全部の花びらが一緒に開かなかったり」

すると、ナイチンゲール先生は、やさしい声で聞きました。「そうね、でもそれはお花のせいかしら？きれいに咲けないからといって、お花を責めたり、ミトゥはする？」

「そうか・・・それは、お花のせいではないね」

ミトゥは少しナイチンゲール先生の言いたいことに、すこし気がつけたように感じました。しばらくして、ナイチンゲール先生が静かな声で、尋ねました。

「ねえ、ミトゥ。おうちがなくなったときのこと、少し聞かせてくれる？どうやっておうちは無くなっていったの？」

ミトゥは答えました。

「風・・・風がおうちを吹き飛ばしてしまったの。かえでの木の枝もたくさんたくさん飛ばされてしまったの・・・」

「まあ！この大きなかえでの木でさえなんにもできなかったなんて・・・そんなに強い風だったのね・・・」と、ナイチンゲール先生。

「そう・・・立派な枝が、まるでふにゃふにゃのワラみたいに吹き飛ばされてしまったの」

と、ミトゥが答えると、ナイチンゲールは、さらにやさしい声で聞きました。

「ほんとに？そんなに大きな嵐だったのに、おうちが飛ばされたこと、ミトゥは自分のせいだと感じていたのね。今でもそうかしら？」

すると、

「ううん・・・そう思ったけど・・・でも・・・」

ミトゥはそう答えた後、すぐに顔を曇らせて言いました。

「でも・・・」

全部無くなっちゃったの。ナイチンゲール先生、何も守れなかった・・・」

それを聞いて、ナイチンゲール先生は言いました。

「うーん・・・そうかしら？それは、ちがうと思うの、ミトゥ。

あなたは、ちゃんと、何かを守ることができたのよ。

そしてそれは、とっても大切な何かなの」

ナイチンゲール先生は真剣なまなざしで、ミトゥに向き合いました。

「えっ？なに？わたし、何を守ったの？」ミトゥは分かりませんでした。

「あなたよ、ミトゥ。あなたは、自分の命を守ったのよ。ほんとうによくがんばりましたね。おうちはまだ作れるし、宝物もまた集めることもできる。でも、あなたの代わりはいないの。それだけ、あなたはかけがいのない存在なのよ」

ナイチンゲール先生はそう言うと、ミトゥをぎゅっとだきしめました。

ミトゥはほっとして、すこし笑顔になりました。

(おしまい)

～ミトゥのお話、ふり返ってみましょう～

① お話のなかで、ミトゥの宝物が出てきましたね。お気に入りの石や虫の羽、木の実などたくさんありました。でも、ナイチンゲール先生の考える本当の宝物は違いましたね。あなたはどう思いましたか？

② このお話では、大きな嵐が起きたことで、森が被害を受けてしまいました。ミトゥのおうちもなくなってしまい、心配ですね。ミトゥが、安心して、嵐の前のような楽しい生活を取り戻すためには、どうすればいいと思いますか？

③ 想像してみてください。あなたはミトゥの大親友。嵐のあと、ミトゥに会いに行きました。おうちが無くなって落ち込んでいるミトゥに、なんと声をかけますか？その後、一緒に何をしたいですか？

Written by Udeni Appuhamilage

Translated by Yumi Kumagai

All rights reserved by Kotori Project ©2022

Organized by:

MUSE (Music Unites Special Education) 認定NPO法人 ミューズの夢

Supported by:

Save the Children Japan and Japan Network for Public Interest Activities

